

# フィリピン農村部における水資源管理の現状と課題 —ルソン島南部ラグナ湖上流域カルメン村に暮らす住民の視点から—

中島 晴香

キーワード: 地域住民, 水資源管理, 農村開発, ラグナ湖流域

## 1. 背景と目的

フィリピン共和国において、経済発展に伴い加速的に進む都市化の流れは、開発隣接地域の水資源、また周辺農村地域に様々な課題をもたらしている。未発達なインフラ整備による流域の環境悪化、土地改変による洪水増加、需要増加による水源の競合、また、開発に伴う地価の上昇と地主—農民間の土地を巡る論争などが現在進行形の問題として存在している。本研究対象地が位置するラグナ湖流域では、それらの課題が如実に顕在化している。先行研究として流域の現状把握・改善・将来予測のために数多くの取り組みがなされているが、実際にその流域に暮らす住民の現状、特に開発隣接地域の農村における水資源の現状について着目しているものは数少ない。本研究では、開発影響下にある農村地域に暮らす住民の目線から、農村地域における水資源の現状と課題、それらに影響する社会背景を明らかにし、持続的利用のための考察を提示することを目的とする。

## 2. 研究対象地域と手法

研究対象地であるカルメン村は、フィリピン共和国ルソン島南部、ラグナ湖の上流域に位置する農村である。村の9割以上は農地であるが、近年周辺の開発が進んでおり、新興住宅街や大型ショッピングモール、工場地帯が隣接し、村の中と周囲との環境差が著しい。研究にあたり、2016年9月25日～12月27日の三か月間、及び2017年7月7日～27日の三週間の二度に渡って現地に滞在し、カルメン村を含む周辺地域の住民による水資源の利用状況、また住民の生活や水資源に影響を及ぼす社会環境全般に関して、参与観察、アンケート調査、半構造化インタビュー、非構造化インタビューを行った。

## 3. 結果と考察

本研究の結果として、主に以下のことが明らかとなった。

### (1) 水資源に関して

カルメン村内では、地下水を供給源とした水道の他に、河川水、井戸、泉、雨水、購入水、排水等様々な水源が利用され、また生活水準の違いによって各利用者が異なる傾向を示すことが分かった。また、水道の管理形態が村によって異なること、更に、カルメン村を含め一帯では、人々の生活用水が、河川水から村による共同管理水源、そして個人或いは法人によって管理される水源へと変遷し、日常に用いる水資源の排除性と競合性が高まりつつあることが示唆された。また、管理主体の違いによって供給条件が異なり、地域在住の個人オーナーが管理する水道設備が、料金・供給可能時間の面で比較的良好に機能していることが分かった。

### (2) 社会環境に関して

調査の結果、カルメンの土地は過去既に9割以上が開発業者に売り渡されており、現在多くの住民は法的な使用権を持たないまま生活を営んでいるということが分かった。またその背景には、周辺の開発とそれに伴う地価の上昇、地主制度といった社会・歴史的経緯が存在し、住民の居住に関する持続可能性への根本的な課題を作り出しているということが明らかとなった。更に、周辺開発に伴う一帯の人口増加、土地の改変、村内外における政治的派閥の問題が、水資源管理の障害となっていることが明らかとなった。

### (3) 全体として

本研究を事例として、開発影響下の農村地域では複雑な社会背景が資源管理に影響を及ぼしていることが明らかとなった。この背景はフィリピンの他農村地域においてもそれぞれ独自のものとして存在していると考えられ、今後の農村地域における水資源管理を考える上で、それらを汲み取っていくことの重要性が示唆された。